Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P1-454 常位胎盤早期剥離を反復した双角子宮（部分型）妊娠の1例

関西労災病院
頴川友美，緒方誠司，衣笠友基子，伊藤公彦，上月雅友

常位胎盤早期剥離（早剥）は分娩の0.4－1.3%に起こり，次回妊娠で再び早剥となるリスクは5－15%とされる．早剥自体の危険因子には種々のものが挙げられるが，一般的に子宮奇形はその中に含まれていない．今回我々は，双角子宮（部分型）が原因と考えられる，反復早剥を経験した．症例は24歳の女性．妊娠初期自然流産2回および妊娠33週での早剥による緊急帝王切開術（1714gの児は2時間後に死亡）1回の妊娠歴あり．今回，4回目の妊娠にて当科で妊婦健診中の2004年7月23日，17週3日時，その前夜よりの腹痛を主訴に来院．外出血は認めず．経過観察目的にて入院となる．入院後，塩酸リトドリンの点滴を開始．18週1日時，外出血を認めるようになる．19週1日時，外出血増量し，腟内に暗赤色の胎胞突出．超音波断層法上，明らかな胎盤後血腫や胎盤肥厚像は認められなかったが，臨床的に早剥と判断し，緊急帝王切開術による人工妊娠中絶術を選択した．腰麻下に開腹するに，子宮はハート状で子宮壁には明らかな溢血は認めず．子宮体部縦切開にて児および胎盤を娩出す．子宮底部の内腔側に，2.5cmの中隔様組織を触知した．胎盤がこの中隔様組織に付着していた部分に血腫が確認され，胎盤全体の約1/3が早剥していた．手術時間58分，出血量650ml．術後7日目に，経過良好にて退院．今後，双角子宮（部分型）に対する形成手術を予定中である．子宮奇形の産科合併症として，不妊，流早産，子宮破裂等が知られているが，早剥との明らかな関連を示唆した報告はない．今回，子宮奇形に起因すると思われる反復早剥を経験したので，若干の文献的考察を加え報告する．

P1-455 前腟壁嚢腫を呈した子宮奇形合併妊娠の一症例

静岡・聖隷浜松病院
高橋泰洋，成瀬寛夫，渋谷伸一，古俣　大，中野紀子，磯村直美，成智美恵，安達　博，松本美奈子，尾崎智哉，村越　毅，鳥居裕一

【緒言】前腟壁が嚢腫状に膨隆する疾患として，膀胱脱，ガートナー腺の腫大などが挙げられる．今回，前腟壁嚢腫を呈した子宮奇形合併妊娠を経験したので報告する．【症例】31歳の1妊1産婦．前回妊娠は妊娠38週に骨盤位の適応で帝王切開分娩となった．前回妊娠時にも，今回と同様な前腟壁嚢腫を認め，「膀胱脱」と診断されていた．分娩後，嚢腫は縮小し，非妊娠時には観察されなくなった．今回，妊娠20週に里帰り分娩の為，紹介となった．初診時，前腟壁より膨隆した嚢腫の陰裂からの脱出を認めた．経腟エコー上，嚢腫とは別に膀胱は存在し，「膀胱脱」ではないと判断，精査目的にMRI施行，前腟壁嚢腫と子宮腔が非常に薄い膜で仕切られていることが判明した．妊娠30週，切迫早産，前腟壁嚢腫の診断にて入院管理となり，安静，腟洗浄，塩酸リトドリンの点滴にて妊娠継続した．妊娠37週，前回帝王切開分娩の適応で選択的帝王切開施行とした．術中，子宮内腔に挫滅した子宮中隔と思われる組織を認めた．同時に前腟壁嚢腫開窓術を施行，嚢腫内容は粘液状であった．嚢腫開窓部より子宮鏡を挿入，前腟壁嚢腫の左側子宮腔内への連続性が確認された．開窓術にて切除された組織の病理組織学的診断は，表面が重層扁平上皮，内腔側が子宮頸管の腺上皮と考えられる円柱上皮であった．以上より，双頸子宮の頸管の一側が盲端であり，妊娠とともに前腟壁方向に腫大したものと最終診断した．【結語】前腟壁嚢腫を呈した子宮奇形合併妊娠の1例を経験した．前腟壁嚢腫の鑑別診断として，子宮奇形も念頭に置くことが必要である．

P1-456 Wunderlich症候群の一例

国立病院機構大竹病院
伊藤啓二朗，廣岡由実子，水之江知哉

【緒言】Wunderlich症候群は，重複子宮・傍頸部嚢胞・嚢胞と同側の腎欠損をきたす非対称性子宮奇形および泌尿器系の異常を示すまれな疾患であり，月経痛，下腹部痛，過長月経，膿性帯下などの症状が見られる．今回われわれは傍頸部嚢胞に生じた膿瘍を治療後，妊娠し自然流産したWunderlich症候群を経験したので報告する．【症例】26歳，未経妊，初経来の月経困難症があり，下腹部痛と発熱で受診した．内診では圧痛を伴う変形した子宮腟部と左方に孔を認め，その孔より悪臭を伴う血性膿様帯下の排出があった．経腟超音波とMRIでは重複子宮と左側の傍頸部嚢胞がみられ，嚢胞内に血液が貯留し腫大していた．CTでは左側の腎臓の形成が認められなかった．貯留した血液に感染を起こしたWunderlich症候群と診断し，嚢胞内容の排出・洗浄とCEZを投与し軽快した．6カ月後無月経にて来院．左子宮腔内に胎嚢を確認したが胎児を認めなかった．経過観察中，胎嚢が傍頸部嚢胞内に排出されたため，腟壁開窓術を行い子宮内容物を除去した．その後傍頸部嚢胞内に月経血の貯留や下腹部痛の再発もなく経過している．【結語】泌尿器系と生殖器系の重複奇形を伴うWunderlich症候群を経験した．傍頸部嚢胞は骨盤内腫瘍，卵巣腫瘍，虫垂炎などと診断され開腹術を施行されることがあり，双角子宮の留血症や留膿腫はWunderlich症候群も考慮すべきと考えられた．また，妊孕性については不明な点が多く，今後の妊娠・分娩については十分な検討を要すると考えられた．

NII-Electronic Library Service